

校長だより

〈第42号〉

平成26年10月9日(木)

岩美町立岩美南小学校

濱津良輔

「カーテンの向こう」

今回はひとつ、道徳資料「カーテンの向こう」をご紹介します。コーヒーでも召し上がりながら気楽に目を通してくださるとありがたいです。濱津の大好きな資料です。「またか」と思われる方、どうかご容赦を。(今回は裏表あります・・・)

ここは、イスラエルのある病院の一室である。うす暗い室内には、多くの重症患者がベッドを並べて横たわっている。窓がたった一つしかなく、しかもそれは、ぶあついカーテンによっていつも閉ざされている。消毒薬のにおいが、室内の重苦しさをいっそう濃いものにしていく。

患者たちは、眠っているのか起きているのか、うつろな目を天井に向けて、ただ時の過ぎるのをじっと待っている。看護婦たちもあまりやっぴこない。ましてや、医師の回診などめったにない。見舞いの客は一人も来ない。何の楽しみもない。変化のないことがこんなにつらいとは。そんな中で、唯一の楽しみは、病室の閉ざされた窓にいちばん近いヤコブが、体をやっぴの思いでねじ曲げながら、カーテンのほんの小さなすき間に顔をっぴこんで、外の様子をながめ、それをみんなに話してくれることだった。

今日もヤコブは、苦しそうに身を乗り出して、すき間に顔を近づけ、

「ほら、向こうの方からいつもの花売り娘が、バラをいっぴいかごに入れてやっぴくるよ。とてもかわいい娘だよ。」

と教える。みんなも顔をほころばせながら、

「バラの花の色は何色だい。きれいだらうね。」

「今日はどんな服を着ているのかね。良くなったら、いっしょに話をしてみたいものだ。」などとやり合う。

「ほら、今日は雨が強いから大変だ。でも、子どもたちが水たまりをピチャピチャやっぴ遊んでいるよ。子どもは元気だなあ。」

「ちっぴな長ぐつだから、水が中に入っぴちゃって……。後でお母さんにしかられなきやいいが。」「わしにも孫が二人いるが、大きくなっぴだらうな……。」

ヤコブが外の様子を話してくれる時だけは、暗い病室に、何か期待と夢が入り込んでくるのであった。

私は、数年前から足の骨がとけていく病気にとりっぴつかれ、いくつかの病院をたらい回しにされて、ここに運ばれたのだった。同室の患者たちも、何らかの重い病気にとりっぴつかれた、身よりのない者ばかりである。ここでも、何人かの患者が入っぴきては、何人かが出ていく。出ていくといっぴても退院するのではなく、あの世からのお迎えである。

いつの間にか、私はヤコブに次いで二番目に古い患者になってしまった。ここに運ばれてくる者は、ほとんど治る見込みのない病人なのだらう。そんな重苦しさの中で、ヤコブの話だけがせめてもの希望であった。

しかし、そのヤコブが眠っぴてしまうと、どんなに外の様子を知りたくても、どうしようもない。動けぬ体をじりじりさせながら、ヤコブの話を待っぴしかない。いや、ヤコブだけが外

の世界を知っているのが、うらやましくもあった。しかし、みんなが行きたがっている窓ぎわのベッドは、いちばん古くからこの病院にいるヤコブの特権だった。

今日は朝からヤコブはきげんがよく、道を通る人々の様子や木々の変化、緑の葉のあざやかさなどを、おもしろおかしく話してくれた。みんなもヤコブの話聞きながら、それぞれの故郷の様子や家族のことなどを思い浮かべていた。

そのうち私は、何となくヤコブがにくらしくなってきた。ねたきりでみんな苦しんでいるのに、ヤコブだけがなぜ外の様子を知る権利があたえられているのか。みんなだって知りたい。みんなだってあこがれている。ベッドをかえてほしいと思っている者はたくさんあるのだ。しかしヤコブは、がんとしてその場所をゆずろうとはしなかった。

ある時、こんなことがあった。特に重症だったニコルが、
「ねえ、ヤコブさん。どうやらお迎えが来たようだ。今日一日だけでいいから、ベッドをかえてくれないかな。少しでも外のいぶきにふれて、あの世とやらへ旅立ちたいんだが……。」

しかし、ヤコブはニコルの申し出を無視した。翌朝、ニコルは冷たくなっていた。病室はいつになく重く沈んだ。

「かわいそうに、ニコル。」

「ヤコブが代わってあげればよかったのに……。」

とつぶやく声が聞こえた。

私だって外が見たい。窓ぎわのベッドへ行きたい。そうだ、ヤコブが死ねばいい。そうすれば、その次に古い私とそのベッドへ行けるのだ。

その日から、私は心の中で、ヤコブの病気が重くなることをひそかに願った。みんなといっしょにヤコブの話に笑っている時も、心の奥底では、にこりもしない自分がいた。

その年の冬は、例年になく寒かった。病室もしんしんと冷え込んだ。

どうやらヤコブの様子がおかしい。何となくかわいた咳をしている。みんなは、いつものように外の様子を聞きたがった。しかし、今日のヤコブは話したがらなかった。

その晩、ヤコブは苦しい息の下で、やっとの思いで身を乗りだし、しぼり出すような声で外の様子をみんなに伝えた。

「明日は……いい天気だよ。……星がいっぱい出ている……きっと……いい天気になる……。」

そこまで言うと、がっくりと頭を落とし、そのまま一言もなかった。看護婦がやって来た。ヤコブはすでに息が絶えていた。

みんなが悲しんだ。私もみんなといっしょに悲しい顔をしていた。けれども、どこかで笑っている自分がいた。

これで外の様子をひとりじめにできる。みんなになんか知らせてやるものか。おれひとりだけで楽しむんだ。にんまりと笑いがこみ上げてくる。

いよいよ窓ぎわのベッドへ移ることになった。昨晩は、気持ちが高ぶって眠れなかった。私は、看護婦に抱きかかえられて、カーテンのそばに横になった。今になって睡魔がおそってきた。それでも、眠さをがまんして、私はカーテンのすき間をのぞき込んだ。

そこから見える外の景色、これこそ自分が求めているものだった。期待に胸がうちふるえた。

そこから見えたもの。

カーテンの向こうは、なんと冷たいレンガのかべだった。